

北条義時

鎌倉幕府を乗っ取った武将の真実

濱田浩一郎

2022年大河ドラマ

『鎌倉殿の13人』

主人公 **北条義時**の

知られざる実像に迫る!

鎌倉幕府を乗っ取り、天皇と上皇を島流しにした男の素顔とは!?

北条義時

鎌倉幕府を乗っ取った武将の真実

濱田浩一郎

星海社

183



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに——2022年大河ドラマの主人公は地味キャラだ

2022年のNHK大河ドラマは『鎌倉殿の13人』である。ドラマの脚本を担当するのは大河ドラマ『新選組!』（2004）、『真田丸』（2016）の脚本も担当した三谷幸喜氏だ。主演は、俳優の小栗旬氏。では、このドラマの主人公は誰かというところ、鎌倉時代前期の武将・北条義時（1163〜1224）。ここに来て、大半の人は首を傾げるのではないか。「二体、誰だ?」と。

日本史に詳しい人なら「名前、知っているよ」となるかもしれないが、そうした人々でも「では、義時ってどんな人物?」「何をした人なの?」と聞かれたら、答えにつまるのではないだろうか。織田信長なら桶狭間の合戦、長篠合戦、本能寺の変。豊臣秀吉なら刀狩りや太閤検地。徳川家康なら関ヶ原合戦。坂本龍馬なら薩長同盟などとスラスラ言えるかもしれないが、北条義時といわれても「何をした人だっけ?」と疑問符がつくのではないか。

そのようなことで、私は、北条義時は、日本史のなかでも結構な地味キャラだと思うのだ。最近の大河ドラマは『おんな城主 直虎』(2017年放送。主人公は彦根藩の藩祖となつた井伊直政を育てた遠州 井伊谷の領主・井伊直虎)など、マニアックな人物を主人公に選ぶことがあるが、今回の大河もその部類であろうか。

しかし、地味だからといって、歴史上、大きな役割を果たさなかったか、重要なことを成し遂げなかったかといえば、そうではない。義時も、日本の歴史上、大きなことを成し遂げているのだ。義時のことを地味キャラだといったが、一応、高校日本史の教科書にも載っている。山川出版社の『高校日本史B』(2014)には、こうある。

「1221(承久3)年、上皇(筆者註・後鳥羽上皇)は畿内・西国の武士や大寺院の僧兵、北条氏に反発する東国の一部の武士を味方にして、北条義時追討の命令をくだし、幕府を倒そうとした。しかし、幕府側の結束はかたく、義時の子泰時らが大軍をひきいて京都へ進軍し、勝利をおさめた(承久の乱)」

いわゆる、承久の乱のところに、義時は登場している(ちなみに、この教科書において、義時の名前は特に強調されていないが、義時の父・北条時政や、義時の息子・北条泰時は太字で名前がクローズアップされている。義時の地味キャラぶりはここにも表れている。なかには、義時

を強調表示する教科書もあることも付記しておく。承久の乱との呼称に違和感を持たれる人もいられるかもしれない。上皇が起こしたのだから反乱ではない、だから承久の変と書くべきだという意見もあろう。しかし一般的に、変とは突発的な変事を、乱とは戦乱を指すので、本書では承久の乱と記載する。

この教科書の記述の要点をかいつまんでいうと、義時は、朝廷と武力でもって争ったのだ。しかも、その戦に勝利した。朝廷側の軍勢を武力で倒した武将として歴史に名を刻んだことで、義時は近代に入ってから、朝敵・逆臣などと負のイメージで語られてきた。

しかし、義時の実像は、朝敵という「汚名」でもって語られるだけの人物なのだろうか。彼は朝廷側の軍勢に打ち勝っただけでなく、北条氏専制の基礎を築き、鎌倉幕府の勢力範囲を全国的規模へと拡大させた。ところが、義時の「業績」や「実像」は一般には余り知られていない。

そこで本書では、彼の実像を、同時代史料を交えつつ、分かりやすく描いてみたい。義時を専門に論じた書籍も2冊ほど刊行されているが、刊行年代が古いものであったり、歴史を専門としない人には読みにくい文体・内容であったりするので、本書においては、できるだけ分かりやすく書いていきたい。歴史に興味を持ち始めた人、大河ドラマファンの人

人、三谷ファン、小栗ファンなど様々な人に読んでもらえたら幸いである。

それでは、義時が生きた平安時代末期から鎌倉時代初期という激動の時代にタイムスリップした感覚で、歴史の扉を開いていこう。

はじめに — 2022年大河ドラマの主人公は地味キャラだ 3

第1章 義時の誕生から源平合戦、頼朝の死まで

13

義時が生まれた北条氏はどのような家か 14

義時の父・時政の人物像 16

義時の誕生と北条氏のサバイバル戦略 20

北条氏の運命を変えた源頼朝との出会い 24

中央の混乱と頼朝・義時の挙兵 29

頼朝の挙兵は革命ではなく、窮地に追い込まれてのやむなくの行動 34

石橋山の戦いで敗北 38

石橋山の戦いの後、義時は北条氏の後継者となったのか？ 42

再起する頼朝軍を支えた時政・義時父子 44

北条義時の転機 50

木曾義仲の登場 52

頼朝と朝廷の急接近、そして頼朝軍上洛 57

範頼軍の出撃と義時の出陣 61

頼朝の信頼度がうかがえる義時のエピソード 63

源平合戦での活躍に見る義時の本質 67

頼朝・義経の対立の裏で暗躍する義時の父・時政 69

頼朝の奥州・京都遠征に側近として付き従う義時 79

鎌倉幕府の成立 82

鎌倉幕府の有力御家人としての北条時政・義時 85

幕府有力者の粛清と頼朝の死 89

鎌倉幕府の有力御家人たち「鎌倉殿の13人」 92

第 2 章 鎌倉幕府内の死闘と義時 101

2代將軍・頼家体制と13人の御家人たち 102

梶原景時の失脚と、「鎌倉殿の13人」の死闘の始まり 106

最大のライバル・比企能員を打倒 110

畠山重忠の乱をめぐって反目する時政・義時父子 118

義時がクーデターで時政を追放し、実権を掌握 124

第 3 章 承久の乱 127

「鬼」と「仏」の2つの顔で幕府を統治した北条義時 128

和田合戦での勝利を経て、ゆるぎない幕府ナンバーワンへ 133

なぜ鎌倉武士はこんなにも争うのか 142

3代将軍・実朝の暗殺 145

幕府と朝廷、義時と後鳥羽上皇の対立 155

承久の乱 162

おわりに — 義時伝説 170

主要参考・引用文献一覧 188

第 1 章

義時の誕生から
源平合戦、
頼朝の死まで

義時が生まれた北条氏はどのような家か

北条義時は、長寛元年（1163）にこの世に生を受けた。父は、伊豆国（静岡県伊豆半島）の豪族・北条時政。母は、伊豆国伊東の豪族である伊東祐親の娘であるという。

では、義時が生まれた北条氏とは、どのような豪族であったのか。本題である北条義時の話に入る前に、少し予習しておこう。

過去、鎌倉時代のイメージから「北条氏は元々、相当の豪族、地方の有力者、関東有数の大豪族ではないか」と考えられていた。北条氏の根拠地（静岡県伊豆の国市の田方郡北条）は伊豆の国府（静岡県三島市。国の政庁である国衙の所在地。今風にいえば県庁所在地）に近い。また、その根拠地は肥沃な狩野川流域の平野にあり、経済力も豊かな地方の有力者と考えられてきたわけだが、北条氏の邸跡の発掘調査が進むにつれて近年「大豪族というほどではないのでは」との意見も出始めている。邸跡を初めて目にした時、歴史学者の細川重男氏は、「狭ー」「しょぼいなア」との印象を持ったという（同氏『執権』講談社）。邸跡は、全域が調査されているわけではないが、規模も出土品も中途半端な遺跡で、残念ながら大豪族の邸跡といった感じではないようだ。

しかし、何も見るべき点がない小勢力かといえば、そうではない。中国同安窠系（中国

福建省)の青磁碗、龍泉窯系(中国浙江省)の劃花文碗など輸入された陶磁器や、京都系の「白土器」(ロクロではなく、指先でこねて作られたという)が出土しているのだ。輸入された陶磁器は、手に入れることは簡単ではなく、所持することが権威の象徴となったことだろう。京都などの都市で流通していた陶磁器を購入し、伊豆に持ち帰ったものか、京都から運送されたものと思われる。

出土品から分かることは、北条氏は地方で閉じこもっていたのではなく、都などとも交流していたということである。ちなみに、北条氏邸跡(円成寺跡)は、西に狩野川が流れ、東には伊豆国府に続く下田街道がある交通の要衝であった。最も多くの建物跡が確認できるのが、12世紀末から13世紀前半の頃で、ちょうど義時が活躍した時代と合致する。

義時が生まれた当時の北条氏は、地方の中小勢力ながらも中央の動向に目を向けていた、時代に敏感な家であったといえよう。

続いて、北条氏の系譜を見てみよう。北条氏の系譜が収録された書物には『尊卑分脈』(南北朝時代に成立した諸家の系図集)、『続群書類従』(江戸時代後期に塙保己一らによって編纂された一大資料叢書)、『系図纂要』(江戸時代末期に編纂された系図集)などがある。これらの系図から分かることは、北条氏は、桓武平氏(平安時代初期の桓武天皇の子孫で、平の姓を

賜った家系（たいらのさだもり）であり、平貞盛（なつかた）（平安時代中期の武将で、平将門（まさかむ）の追討で活躍）の流れをくむということだ。貞盛の曾孫の直方（なつかた）が北条氏の始祖とされている。

ところが、直方から時政までを4世代としている系図もあれば、5世代、6世代としている系図もあり、系譜は混乱をきたすことになる。系図というものは、北条氏に関わらず、でっちあげや、偽り、齟齬が横行するもので、往々にしてそのまま信用することはできないし、系譜の完全な復元も困難といわざるを得ない。この系図の混乱から分かることは、伊豆にいた頃の北条氏は、系譜がしつかりと伝わるような氏族ではなかったということだ。このことから、北条氏は名家・大豪族などではなく、中小規模の武士団だったという説が補強できよう。

地方の中小規模の武士団だった北条氏が、なぜ、そしてどのようなようにして、鎌倉幕府を牛耳るほどの権力を得ることができたのか。北条氏の躍進の秘密は、第2章以降で明かされることになるだろう。

義時の父・時政の人物像

さて、義時の前半生を語る上で欠かせない父・北条時政は、どのような武将だったのか。

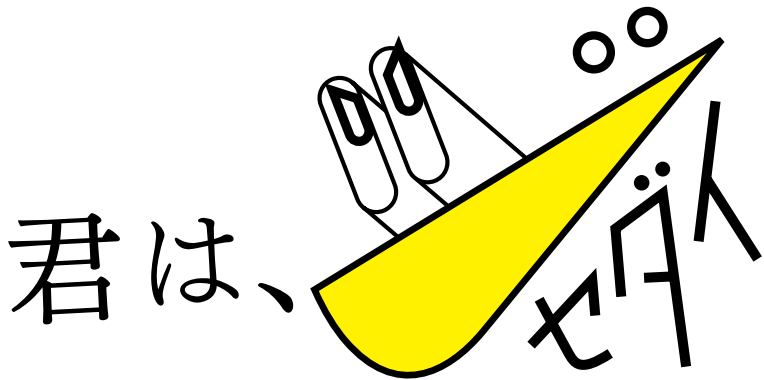
本題の義時に入る前に、もう少しお付き合いいただきたい。

まず来歴については、時政の父も系図によつて違っているくらい、時政の来歴も定かではない。

では、時政はどのような人物だったのか。「時政は伊豆国の在庁官人」だったと、かつて、今上陛下の指導教員を務められたこともある歴史家の安田元久氏（元学習院大学学長）は書かれている。在庁官人とは、国衙で事務をしていた下級の地方役人のことである。これまた今風にいえば、地方公務員といったところか。が、果たしてどうか。義時の家庭環境を調べると、ここまで述べたことに疑いの余地が出てくるのである。

時政のことを在庁官人と記しているのは、実は鎌倉時代末期の文書である。元弘元年（1331）、後醍醐天皇やその皇子・護良親王は鎌倉幕府の打倒を目指して挙兵（元弘の乱）するが、援軍を得るために、各地に令旨（皇太子や皇后の命令を伝えるために出された文書）を下す。現存するその文書（護良親王令旨）の始まりに「伊豆国の在庁官人に過ぎなかつた北条遠江前司時政の子孫である東国の野蛮人どもが、承久年間以来、天下を支配し、天皇家を見下していた……」とあるのだ。

これは、原文を現代語訳したものだが、原文には「伊豆国在庁北条遠江前司時政」と記



君は、
何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!